

504

特274

32

中國四億五千萬民衆に告ぐ

—日本は何故膺懲戦を起したか—

國際日本協會



0010323000

0010323-000

特274-32

中国四億五千万民衆に告ぐ

國際日本協會

昭和12

ABJ

中國四億五千萬民衆に告ぐ

- 一、日本は果して侵略國か……………(一)
- 二、日本は衷心何を求めてゐるか……………(四)
- 三、日支事變の眞因とわが膺懲戰の意義……………(八)
- 四、南京政權は中國民衆の敵か味方か……………(三)
- 五、南京政權の外力依存と反アジア性……………(二〇)
- 六、日滿支の提携とアジア人のアジア建設……………(二七)

國際日本協會

中國四億五千萬民衆に告ぐ

——本篇は、元來支那文に翻譯して、廣く日、滿、北支に在住する中國系知識分子の間に頒つことを目的としたものであるが、しかし、内容の趣旨は、わが對支膺懲戰の眞意義を闡明せんとするにあるを以つて、一應その邦文のまゝ、を江湖諸賢の清鑒にも供へることにした。——

日本は果して侵略國か

中國四億五千萬民衆諸君！

諸君は、日本が如何なる國であり、また日本の眞實の要求が何んであるかを理解してゐるか？

諸君は、西洋人から、或は諸君の先輩から、日本は恐るべき好戰國であり、憎むべき侵略國であると聞かされてゐるかもしれない。だが、それは果して眞實であるか。否な、斷じてそうではない。

日本は確かに尙武の國であり、武士道の國である。だが、その尙武、その武士道は凡そ戦ひのために戦ひを好む野蠻な好闘心の表現ではない。漫りに邪劍を揮ふことは古來わが武士道の最も忌み嫌ふところである。正しき道理のために、正義のために、破邪顯正のために降魔の利劍を揮ふことのみが、武士道の名において許されるのだ。わが國にあつては、清麗櫻の花の如く、明皓秋の月の如き心情こそは武士の魂とされ、無耻と卑怯と貪慾と奸邪とは極度に擯斥されるのだ。



日本では「花も實もある武士」といふ言葉、「強いはかりが武士ではない」といふやうな言葉が、一種の常套語となつて來てゐる。これは武士道なるものが、單に戦ひに強いことや勇氣に富むことを以つて満足しない事實を立證するものである。況んや武技の練達を誇つて漫りに殺人劍を揮ふが如きは、武士道における邪道中の邪道として擯斥されるのだ。

諸君は、わが明治維新の三傑なるものについて聞いたことがあるか。これは西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允の三英傑を呼ぶのであるが、このうち木戸孝允は非常に優れた劍道の達人であつた。彼れは久しく劍戟の間を馳驅した人物であるにも拘らず、一生を通じて一度もその劍を抜いたことがなかつたといはれてゐる。西郷にしても大久保にしてもまた多分そうであつたらうと思ふ。劍は絶対必要の場合にしか抜かないのが武道の真髓であつて、孔孟の謂ゆる智、仁、勇の三達徳こそは、武士道の最高標識であるのだ。この點は、恐らく諸君の道徳的理想と何等異なるところはない。故に日本人は正義のために、正道のためには常に身命を賭して戦ふが、利慾や不正義のために戦ふことは、本能的にこれを忌避するのだ。日本人を以て好戦國民となすが如きは、日本精神の本質を解せざる嗤ふべき錯観である。

次に、日本を以つて侵略國となすが如きもまた、右と同斷の曲解である。

日本は自衛のために、國威擁護のために、或は盟邦に對する義務のために屢々戦つたことは事實である

だが、掠奪のために、或は單なる野望のために、無名の師を起したことは斷じてないのだ。もし諸君が吾人の言を虚偽だと思ふなら、須らくその反證を擧げて見給へ。

朝鮮における東學黨の亂を契機とする日清戦争にしても、義和團の蜂起による北清事變にしても、或はロシアの滿鮮進攻による日露戦争にしても、日本にとつてはすべてこれ他からの挑戰的行動による自衛戦に過ぎなかつたのだ。滿洲事變はどうだ、と諸君はいきり立つて問ひ返すかもしれない。滿洲事變にしても、上海事變にしても、或は北支事變にしても、諸君の國における中央乃至地方軍閥の不法極まる侮日的挑戰に因由したものであることは、内外人の均しく認めてゐるところである。

日本國民は常に不法の挑戰を默過するものではない。西洋諸國は、たとへ他からの不法挑戰にもせよ、あれまで戦はずともよからうといふかも知れぬ。なるほど、東亞を單なる美衣飽食のための搾取場と心得てゐるかれ等にとつては、それがために萬里の外に兵を進めることの損失を心得てゐる。その意味においてかれ等の言分は尤もである。昔は僅かの兵力で極東を威嚇し、易々とかれ等の野望を充たすことが出来た。だが、今日ではそうは行かない。従つて、費澤費を得るがために、過大な征戰の犠牲を拂ふ氣持にはなれまい。だが、日本の戦ひは費澤のためではない。常に生命のためであり、皇國の面目のためであつた。完全にその脅威を一掃し、國威を發揚するまでは斷じて退くことは出来ないのだ。これが日本魂の特異性

である、その結果として、日本は若干の賠償的戦利品は得た。満洲國の誕生の如き自然的な副産物を見たこともあつた。しかし、それ等は決して侵略の産物ではなかつたのだ。這般の消息については以下順を遂ふて説明するであらう。

兎に角、西洋諸國が從來常套手段として採用し來つたところの謂ゆる侵略的政策の如きはわが皇道精神の本義に背馳するものである。従つて事實日本は斷じてそれを敢てしたこともなく、また敢てしやうともしてゐない。皇道は儒教に謂ゆる王道に相ひ通ずるものであり、萬乘の君主の大道であつて、千乘、百乘の覇者の道とは全く選を異にするのである。すなはち、皇道精神は飽まで道義に立脚するものであり、權力や武威に頼らんとするものではない。儒教に謂ふところの治國平天下の大道こそは、そのまゝわが皇道の大本であつて、これを付るに西洋的尺度を以つてするところに、すべての誤解と認識不足を生ずるのである。白人諸國が、かれ等從來の行動を自ら顧みず、わが日本を以つて漫りに侵略國呼はりするが如きは誠に越權極まる笑止の沙汰である。

日本は衷心何を求めてゐるか

中國四億五千萬民衆諸君！

諸君は、われ等が何んといはふとも、事實上日本は侵略をやつてゐるではないか、といふかも知れぬ。そして諸君は或は朝鮮を、或は滿洲國を、そして或は冀東、冀察をさへもその實例として算へ上げるかも知れない。だが、それは諸君が、事態の眞意義を解せざるがための曲解である。

諸君！ それを説く前に、まづ一つの事實を豫め知つておいて貰はねばならぬ。それは、日本が衷心求めてゐるのは抑も何のであるか、といふことである。諸君は、果してそれを正しく理解してゐるであらうか。

日本は勿論、諸君と同じく自國の發展と隆昌とを求めてはゐる。これは恐らく萬邦共通の事實であつて何の不思議もあるまい。

諸君は、日本が、自分一國だけの繁榮や發展を求めてゐるものと思ふか。假りにそうだとしても、自國だけの繁榮といふ事が今日の國際情勢において、殊に東亞の實情において、果して許されることと思ふか。日本は、恐らく諸君の國以上に、餘りにも長い間鎖國の夢を貪つてゐた。そして、その夢から醒めた時には、白人帝國主義諸國の貪婪な鋭い牙が、われ等の身邊に限なく迫つてゐた。そして北も南も、殆んどかれ等によつて食ひ盡されやうとしてゐた。現在でも、否な、現在では、最もかれ等の食慾を唆る諸君の國が、東洋に残された最後の且つ最大の殘肴であるのだ。いや、それも、僅かに一部残されてゐるといふ

に過ぎない。

繰返していふが、われ等は諸君と共に、餘りにも長い間睡り過ぎてゐた。それがために今日では殆んど取返しのつかぬまでに手遅れになつてゐる。僅かに一部取り残されてゐる諸君の領土も、白色、乃至赤色帝國主義の搾取的競争舞臺となり、植民地的競争場裡と化してゐる。「お前の國もその競争仲間の一つではないか」——など、混つ返すのは暫く待つて呉れ給へ。それは順を遂ふて話すつもりだ。

兎に角、かくの如き環境において、諸君の國も、諸君と血で繋がるわれ等の國も、どうして平和と、發展と、繁榮とを期待することが出来るか。

諸君！ 諸君にしてもわれ等にしても、血と宿命と宿縁とに繋がれた同じくアジア民族であり、同じく極東民族である。しかるにわれ等の住む東亞は、今や正に、白色帝國主義豺狼の猛り狂ふ修羅場と化し去つてゐるのだ。かくても尙ほ、われ等の平和と福祉とが期待されると思ふか。斷じて期待される筈はないのだ。

そこで、われ等にとつての先決問題は、如何にして東洋の平和を實現するかといふことである。東洋の平和なくして東洋諸國民の安定はあり得ない。東洋諸國民の安定なくしては、われ等の幸福も繁榮もあり得る筈はない。東洋の平和こそは、實にわれ等東洋民族の繁榮と發展と幸福との最大不可缺の先要條件で

あるのだ。

そこで端的にいふが、日本がまづ何よりも念願してゐるのは、實にこの東洋平和の實現である。勿論諸君においても、恐らくこの點に異存はあるまいと思ふ。

しからは、東洋の平和なるものは如何にして實現されるか。いふまでもなく、東洋平和の癌であるところの赤白帝國主義の搾取と壓迫とから、東洋諸民族を解放すること以外に、その眞實の道はあり得ない。勿論これは、必らずしも歐米諸列強の東洋からの追放を意味するものではない。正常なる「與へ且つ取る」の相扶關係は、萬邦に適用さるべき人類共榮の大道である。ただ、われ等は功利一片の搾取と支配と制覇との一掃を念願するのみである。白人には日向を、東洋人には日蔭をといった、不合理極まる支配と隸屬との關係を勦滅せねばならぬと信するのだ。

では、まづ誰れがそれをやるのか。

諸君！ 東洋の地圖を開いて見給へ。差當りこの大任を果し得るものは諸君の中華民國と、われ等の日本帝國との外にはないではないか。だから、われ等は常に叫んで來たし、また現に叫んでゐる、「日支の提携と協力こそは東洋平和の礎石であり樞軸である」と。諸君はそうは思はないか。

これは決して、日本國民の單なる御題目でも空念佛でもないのだ。日本國民の衷心の祈願であり絶對的

の信念なのだ。日本の謂ゆる大陸政策の根幹は常にこゝにあり、それは絶対不動の大方針なのだ。それにも拘らず、事實上日支の關係が多の場合圓滑を缺き、ともすれば今回の如く、兵火をさへ交へねばならぬとは、抑も何たる不幸、何んたる痛恨事であらうぞ。では、一體これは何にが爲めであらうか。

日支事變の眞因とわが膺懲戰の意義

中國四億五千萬民衆諸君！

日本の最大最高の念願が、東洋平和の實現にあることは既に述べた。また東洋平和の實現は、日支の提携と協力とを先要條件とすることも既に述べた。

日本の根本要求が常にこゝにあり、また日本の大陸政策の根幹がこゝにあるとすれば、日本のこの精神に對立し逆行するものは、われ等から見れば、常に日支提携の障礙物たるのみならず、實にまた東洋平和の癌でもなければならぬ。而して、障礙物は斷乎としてこれを排除せざるを得ないのだ。

ところで、常に日支提携の、そして東洋平和の障礙物となつて來たものは、恐らく常に諸君をも惱まし

來つたであらうところの、支那の軍閥政治家たちであつたのだ。例へば滿洲事變の際は、中央においては蔣介石、滿洲においては張學良がそれであつた。

蔣介石は北伐完成の威を誇り、また一部國民の信頼を買ふために、自己の力を量らず急激に國權恢復など、稱して極端な排外政策を強行し、特に日本に對しては猛烈な排撃的態度に出たのだ。ところが張學良がまた、蔣の信頼を得るために、自己の勢力が日本軍の血によつて護られ、また滿洲が日本人の力によつて繁榮しつゝある事實を忘れて排日行動に出で、更に幾多の條約を無視して日本の既得權益を壓迫した。かくて或は萬寶山事件となり、或は中村大尉事件となり、或は滿鐵爆破事件となつて、終に日本の自衛權發動を餘儀なくせしめたのである。しかもかれ等の行動は、決して支那そのものの、滿洲そのものの眞實の幸福と發展とを思ふの念から、或は東洋平和の大局的見地から出發したものではありません。要はたゞ自己政權擴大強化の一點から、全く利己的動機によつて行はれたものに過ぎないのだ。

滿洲は日本の隣接地帯である。滿洲がロシアによつて略取されたとする。朝鮮は直ちに危殆に頻する。やがて日本内地が直接脅威される。これは日本に取つては直ちに生存の問題である。日本が國家の運命を賭して大國ロシアと戦はねばならなかつたのは、この危険が迫つたからであつた。日本は血を以つて滿洲を護つた。その後、日本は財力と人力とを傾けて、滿洲開發のために營々として努めた。その結果北支の

民衆はドシ／＼と滿洲に流れ込んだ。滿洲の生産力と購買力とは増大した。張作霖父子はお蔭でその搾取率を高め、大いにその富と権力とを擴大することが出来た。しかるに張學良は自ら何の犠牲も拂はずに、暴力を以つて日本による寶物のすべてを掠奪しやうとした。諸君は、暫く日本の立場に立つて考へて見給へ。果してかゝる暴戾を平氣で忍び得ると思ふか。況んや滿洲の日本に對する關係は、單なる利害、單なるそれではないのだ。赤色ソ聯の觸手は滿洲の奥深く延びてゐた。いざといふ場合日本はこの地る資産表を、再び自らの血によつて護る外なき運命を感じてゐたのだ。

文字通り、日本の生命線であるところの滿洲——その滿洲が今更、暴虐な支那軍閥の手によつて、勝手に處分されることを黙過するわけにはいかない。日本が斷乎自衛權の發動を決意したのは誠に當然の措置であつたと、われ等は確信してゐるのだ。

さて、今度の日支事變だ。この事變の機縁となつた蘆溝橋事件の如きは些々たる一小事件に過ぎなかつた。この種の侮日的事實なら、既に何十何百を以つて算へ得よう。問題はそんなことではない。根本は南京政府が國策として遂行したところの抗日政策そのものにあるのだ。

日本は始めから、支那の領土侵略、主權侵害などは毛頭考へてゐないのだ。ただ、そうした猜疑を懐かせるやうな事態を結果したのは、日支提携を根本方策としてゐる日本と正反對な政策を、支那軍閥政權—

特に蔣介石政權が強行した結果に過ぎないのだ。

諸君の知る如く、南京政府は抗日政策と抗日教育とを以つて一貫して來た。わが近衛首相もいつてゐるやうに、隣邦に對する排撃と侮辱とを以つて一國の國策とし、國民教育の根本方針としてゐるやうな政府が古今東西の史上を通じて何處にその類例があるか。歐洲において、たとへ獨佛が長く犬猿の間柄を續けて來たとしても、相手を憎惡し排撃することを以つて、まさか國民教育の方針とはしなかつた。

しかるに蔣介石政府は、自己政權強化の手段として敢てこれを實行し、また、それによつて白人諸列強の甘心と支持とを確保せんとした。彼れは抗日によつて日本の實力行動を促し、また、そうすることによつて益々抗日し、徒らに隣邦を苦しめつつ、以つて赤白帝國主義の進出と、自國の再植民地化とを急ぎつゝあるのだ。

實に彼れは、自ら事態を悪化させつゝ、その罪をすべて日本側に負はせ、以つて帝國主義諸列強の喝采を博し、得々然として自己政權の強化を内外に誇り、そして自ら墓穴を掘り深めて行つたのだ。

諸君は蔣介石政權を眞實何う考へてゐるか。これは次の課題とするが、諸君が假りに何う考へてゐやうとも、彼れの行動は、東洋平和の大局から見て、斷じて是認さるべき性質のものではない。日本の行動にも幾多の失策はあらう。だが、日支親善と東亞の和平が、わが大陸政策の根幹であり大方針であることに

誤りはない。大局的に見て、日本の政策は決して目標を誤つてはゐないのだ。

しかるに蔣介石政権の進路は、隣邦排撃、西力導入、容共聯ソ、東亞攪亂といった一聯の亡國的政策の推進ではないか。事茲に至つては、わが日本は、單に自衛のみを以つて満足することは出来ない。東洋平和の實現を自ら破壊せんとするこの危険極まる存在に對し、斷乎鐵槌を下すことは、現段階において日本に課された一大使命であり一大責務である。蓋し、東洋廣しと雖も、敢てそれを爲し得るものは、今やわが日本の外にはないからである。

だが、日本は極力事件の擴大を避けて、南京政府の反省を促さうとした。それがために堪へ難きを忍んで隠忍し自制した。だが、それは不幸にして、徒らに逆効果を招くのみであつた。南京政府は日本の眞意を理解せず、これを以つて日本の弱腰と見た。日本は支那を恐れ、ソ聯を恐れ、英、米、佛を恐れてゐると見た。南京政府は反省どころか、益々威丈け高になつて抗日氣勢を揚げ、侮日行動を煽り立て、底止するところを知らなかつた。

諸君！ 日本國民は正義のためには、いつでも國運を賭して戦ふだけの用意を持合せてゐる。この故に日本は、斷乎として膺懲の聖師を進めることになつたのだ。

これは、諸君のためにもわれ等にとつても、誠に悲しむべき痛恨事である。極東における同種同文の民

族同士が、白人環視の面前で、今や流血の死闘を演じつゝあるとは！

だが諸君！ 親友同士も時には殴り合ふこともある。それがために却つて親交が深まる例も少くはない。否な轉禍爲福の妙機は自らこの裡に秘められてゐるかもしれない。況んや、われ等が撃たんとする目標は南京抗日政權と、これを繞る惡質の抗日軍隊とあるのみで、斷じて中國々民大衆ではないのだから。

南京政權は中國民衆の敵か味方か

中國四億五千萬民衆諸君！

われ等は再び赤心を以つて宣言する。われ等の敵は南京抗日政權とその軍隊とであつて、斷じて中國々民大衆ではないといふことを。

諸君！ この宣言は諸君の耳には、奇怪に響くかもしれない。或は一種の詭辯に屬するものと解されるかもしれない。が、斷じてそうではない。それは何故であるか。

われ等の認識においては、南京政權は諸君がそれを何う考へやうとも、斷じて諸君の味方であらうとは思はない。否な、寧ろ諸君の敵でなければならぬと觀念してゐるのだ。

次にその理由を述べて見よう。

南京政權は、由來以黨治國を標榜し來つたものである。そしてその政治は國民黨なるもの、一黨專制である。従つて一般國民は何等中國の政治に參與してゐない。

さて、國民黨員の數は約八十萬と稱せられてゐる。この中には、半數の文盲なる黨軍兵士が含まれてゐる。その餘の四十萬も十中九までは單に黨籍を有するのみで、黨に對して何等の發言權も有してはゐないかくて實質を追求して行くと、結局國民黨とは、蔣介石、孔祥熙、宋子文、孫科等といった謂ゆる宋一家の私黨たることが判明する。従つて以黨治國は、實は以宋治國である。要するに宋一家が中國の全政治を勝手に請負ひ、中國四億五千萬民衆は、たゞ宋家の前に、奴隸の如く拜跪させられてゐるに過ぎないのだ。

諸君！　そこで中國四億五千萬民衆は、宋家のために軍費を献じ、奉仕勞働を爲し、宋家が戦ひを欲すれば諸君はために塹壕を築き、砲彈の的となり、流血を餘儀なくされるのだ。だが、諸君は宋家の命令に對しては、一切沈黙と黙従とを強いられ、苟くも異議を挿めば、牢獄と墳墓とが諸君を迎へるだけである。しかも戦争の獲物は、たゞ宋家がこれを獨占するだけで、諸君は寸毫も酬ひられるところはないのだ。

では、抑も宋家が諸君から巻上げる金品は、一體何のために使用され、また諸君に酷使と流血とを強制するところの戦争は、何のために戦はれると思ふか。

諸君！　宋一家は諸君の前に、曾つてその金錢の費途を明白にしたことがあるか。近頃は一應政府豫算

といふものを公表する。だが、諸君はそれを信用し得ると思ふか。諸君は蔣介石や孔祥熙や宋子文等の財産について聞いたことがあるか。それは何人にも極秘にされてゐるが、諸種の材料を通じて測知された額は數億に達するものと見られてゐる。いづれにしても、かれ等が相當巨額の私財を蓄積してゐることは確かな事實である。

では、その巨額の蓄財は何處から來たか。決して雨の如く天から降つて來たのではない。中國々民大衆の膏血を絞り取つたものの一部であることは決して間違ひない。

諸君がもし僅かでも、他人の財物を侵したとするならばどうか、中國の小官吏には、僅か百元千元の收賄のために、或は投獄され或は死罪に處せられた者が多々あると聞かされてゐる。だが、宋家の何人が曾つて、公金費消の名において、或は收賄の名において懲罰され、罷免され、投獄されたことがあるか。

諸君！　宋家は諸君の知る如く政權と金權とを二つながら壟斷してゐるのだ。宋一家の支配下にある諸銀行は従來國民の金融機關ではなく、單に南京政府の金融機關であつた。それは専ら政府の公債引受けによつて資金を蓄積した。しかもその公債を發行する政府が、同じく宋一家であるのだ。金を貸す者も金を借りるものも宋一家なのだ。

では、同族の中で、いや同一の人間が、自分で金を貸し自分で金を借りたのでは、全く一文にもならぬ

ナンセンスではないか、と諸君はいふかもしれぬ。所がそうではない。同じ人間ではあるが、金を貸す時は銀行屋となり、金を借りる時は政府當局となるのだ。南京政府は貧乏である。第一、政權維持のための軍事費が、幾ら諸君の膏血を絞つても足りないのだ。ユダヤ人からの借金の利子にも追はれるのだ。そこで政府は——政府の名において宋家は、高利の赤字公債を發行する。すると銀行の名において同じ宋家がそれを引受ける。そこで政府は公債利子の形で、諸君から絞り上げた税金の中から、高い利子を宋家の金庫の中に拂ひ込む。その拂ひ込む高い利子は宋家の金庫から出るのではない。またその公債も宋家の負擔ではない。それは國民大衆の負擔であつて、その利子を拂ふものもまた中國々民大衆なのだ！ かくして宋家自體の金庫はこのカラクリを通じて無限に膨れて行くのだ！

諸君！ 所で、諸君が南京政府へ税金や勞力の形で收めたものが一體何に費消されると思ふか。その一部が宋家の金庫に納まることは既に見た。だが、それ以外は何うなるのか。

諸君！ 遺憾ながら、こゝでそれを詳しく述べる暇はない。簡單に話そう。

中國經濟學者の報告によると、例へば民國二十年度における南京政府の歳出總額は約七億元である。今その支出關係を見ると、軍務費が四四・五％、債務費が三九・五％となつてをり、この兩者だけで八四％を占めてゐる。そして驚くべきことには、一般政務費は豫算總額約七億元のうち、僅かに約二千六百五十萬

元足らずであつて、三・八七％といふことになるのである。ところで債務費といつても、その債務の大部分は軍事費に宛てられたものであるから、結局政府支出の殆んど全額に近いものが軍費だといふことになる。そして多少とも諸君に關係のある政務費は、政府總支出額の二十五分の一にも足りないのだ。

更に、南京政府の公表によると、民國十六年から同二十年までの五ヶ年間の公債發行は十二回、額面合計約十億元となつてゐるが、このうち軍政費が八五・六％を占めてをり、この軍政費のうち軍費は九二・二二％、政費は七・七八％といふのだから驚くではないか。かういふ政府は、地球上何處を探したつて、南京政府以外には恐らく存在しない。

ところで、その軍費といふのは一體何か。諸君！ これこそ實に問題である。

日本でも諸外國でも、軍事費といふのは即ち國防費で、全國民を外敵の脅威に對して護るための費用である。所が、南京政府の場合は全くその意味を異にしてゐる。

諸君も知る如く、南京政府自體は、少くとも今度の事變までは、外來軍と戦つたことはない。滿洲上海事變當時と雖も、謂ゆる中央軍は一兵をも損しなかつたではないか。

では、一體何のために前述のやうな莫大な軍費を使つたのかといへば、すべてそれは内戦のためであつた。蔣介石は南京政府統治の約八年間（一昨年まで）に、延べ日數三千二十八日、即ち八年間以上戦つた

といはれてゐる。これは同時に二つ以上の戦争をやつた關係と思ふが、兎に角彼れは毎日戦争を商賣にしてゐたわけである。しかも、すべては内戦であるのだ。しからは彼れの場合、内戦とは抑も何を意味するのか。

蔣介石の場合、内戦とはすべてこれ、蔣政権の維持と、宋一家の權益擁護とのために戦はれたものである。換言すれば彼れの内戦は、彼れの政敵打倒のためにのみ戦はれたものである。しかもその政敵といふ政敵は、共産軍の場合を除けば、悉くこれ國民黨所屬の要人連中である。即ち彼れの同志であり、先輩であり、同僚であり、友人であつたところの連中である。彼れが、かうした連中を悉く敵にしなければならなかつたことは、偶々蔣介石なる人物が、背徳不信の漢奸なることを立證するものではあるまいか。

それは兎に角、蔣介石は中國開關以來の内亂製造の名人であつた。彼れが軍閥政府と稱して打倒したところの北京政府と雖も、彼れほどに軍費も使はず、また彼れほどに戦争もしなかつた。繰返していふが、しかもその戦争は殆んど凡て國內戦であり、また彼れの軍は、すべて彼れの私兵であつたのだ。

更に彼れは、藍衣社、CC團、憲兵第三團その他の秘密的な私的警察隊や暗殺團を特設して、政敵打倒の任務に當らせた。勿論その費用は、すべて諸君から取り立てた血と汗との結晶であつたのだ。即ち彼れは自己の権力と宋家の利益とを護るために諸君を苛斂誅求し、諸君の勞力と身命とを徵發して、私闘と内

戦とに耽り、産業を破壊し、人力を消磨し、國力を疲弊させ、その上漫りに外資と外力とを國內に導入し以つて諸君に對する二重の搾取を強化したのだ。これが正に、蔣介石が對內的に爲し來つたところの實際の業績である。然らば彼れは實に國家的の大盜であり、古今無比の賣國奴ではないか。

かくても諸君は蔣介石を、そして南京政府を、諸君の元首、諸君の政府なりと考へることが出来るか。事實は最も雄辯に、彼れと彼れの政府が、諸君の敵であることを證明してゐるではないか。

では、かれの軍隊は何うか。諸君の國では「好漢は兵に當らず」といふ言葉がある。それほど諸君の國では軍兵が卑しめられてゐる。これは誠に尤も千萬である。事あれば、自國の同胞を擄掠して顧みないやうな軍隊は、凡そ何處の國にも例を見ないからだ。かうした危険極まる存在を年中動かしてゐたのが蔣介石その人であつたのだ。諸君はそれでも、蔣介石に感謝すべき何物かを見出し得ると思ふか。

南京政權の外力依存と反アジア性

中國四億五千萬民衆諸君！

われ等は蔣介石とその政權とが、對內的に果したところの業績の一端を述べた。では、彼れは對外的には何を爲し來つたか。

諸君の知る如く、南京政府の對外政策は、終始一貫謂ゆる以夷制夷なるものであつた。

もし蔣介石が、その内戦に捧げた金と努力と熱意とを以つて、内政の整備、産業の開発、國防の充實等に専念し來つたならば、中國は今頃立派な近代的獨立國家になつてゐたかもしれない。そして眞に獨立自主の立場から、堂々たる對外政策を進め得たかもしれない。われ等日本國民は、中國が一日も早く自主獨立の近代的國家として立ち上り、われ等と提携して、共に共に東洋平和の實現のために協力し得る日の、一日も早く來たることを待望してゐた。

だが、蔣介石政權は全くその方向を誤まり、眞に國力を伸長する所以を知らず、陰險極まる以夷制夷なる陋策を弄ぶことによつて、國威を汚し、國運を危殆に瀕せしめたのである。

では、以夷制夷とは何んであるか。謂はゞ、且には吳客を迎へ、夕には越客を送るところの賣女的對外政策である。大きな財布を懐ろにして心にもない巧言を弄する者は珍客として歓迎し、如何に眞情に溢るるとも、財布の貧寒な者や敢て忠言を吝しまぬやうな者は、木強漢として擯斥されるのだ。而して、蔣政權の對外政策なるものは、殆んどこれと選ぶところがないのだ。

彼れは自己政權擁護のために、巧言と御世辭と大きな財布とを用意してゐるユダヤ人を歓迎し、これ等のユダヤ人を通じて歐米列國政府と驩を通じた。そして實意に充ちながらも財布の貧寒な、その上屢々苦言を呈して憚らぬ日本に對しては、背を向けたのだ。日本などを相手にするよりも。歐米列國を相手にする方が遙かに御利益があると考へたからだ。

歐米列國の歡心を買ふには、かれ等と肌の合はぬ日本を虐待する必要がある。かくて彼れは堂々と抗日侮日の看板を掲げ、それによつて益々歐米列國の喝采を博し、その歡心を高めることが出來たのだ。即ち謂ゆる以夷制夷とは、要するに歐米依存、日本排撃の別名に過ぎない。勿論、この歐米依存主義の背後には、卑屈なる白人崇拜の奴隸的事大思想が横はつてゐることはいふまでもない。

諸君！ 諸君はこの歐米依存と日本排斥とを以つて、當然且つ自然なる政策と考へるか。多分諸君の中には、そう考へる者も少くはあるまいと想像される。諸君もまた、多かれ少かれ白人崇拜病に罹つてゐる

かもしれないからだ。

諸君は、言ふかもしれない。歐米諸國は事實上日本人よりも親切だ。金も貸してくれる、クレヂットも與へてくれる、學校も建て、病院も拵へてくれる云々と。しかるに日本は容易に金も貸してくれない。品物も融通してくれない。學校や病院なども建ててくれない云々と。もし金の點からいふならば、確かに歐米諸國は金持ちであり、日本は貧乏である。いや歐米諸國はその過剰資本と過剰製品の捌け口としてこそ、諸君の國に親近してゐるのだ。それ以上、中國に對する彼れ等の關心は何もある筈はない。要するに西洋諸國が、一見親切らしい態度を諸君に示してゐるのは、やがて諸君から、高い商品、高い利子、高い利潤の形態において、十倍二十倍の報酬を期待してゐるからに過ぎないのだ。だが、日本の中國に對する關心は、決してしかく單純なものではない。また單純ではあり得ないのだ。

諸君は日本をとかく煩さい國だと考へるかもしれない。だがそれは、日本が中國を單なる外國、赤の他人と見做すことを許されないからなのだ。中國の運命そのものが、直ちに日本の運命にかゝはると信じてゐるからだ。如何に争ひ如何に喧嘩しやうとも、好むと好まざるとにかゝはらず、日支兩國は兄弟として、盟友として握手せざるを得ない宿命の下におかれてゐる。従つて日本は、微力ながら相當の犠牲を拂つても中國のためには盡したいのだ。また盡されもしたいのだ。だが、日本は決して歐米諸國の如く、中

國を喰物にしやうとは決して考へてゐない。如何にすることが真に中國のために圖る所以かといふことを、日本國民は十分に心得てゐる。そして、出来るだけ中國を援ける意圖に燃えてはゐる。だからこそ、日本は蔣政權を積極的に援けやうとしなかつたのだ。しかれば、それはどういふわけか。單なる自己政權強化のために、歐米依存の不見轉政策を弄する政權、御都合主義から、漫りに惡辣無比な日本排撃に没頭する政權、そして中國をユダヤ資本團のために賣らうとする政權、アジアの侵略者、東洋平和の攪亂者たる赤白帝國主義の蹂躪に身を委せやうとする政權——そうした政權を援けることは、斷じて中國そのものを援ける所以ではないからだ。

假りに、日本は中國に對して侵略的だと假定する。しからば抗日政策は當然である、と諸君はいふかもしれない。假りに諸君の言を正しいとする。では、諸君は外蒙や新疆を事實上略取してゐるソ聯に對し、チベットを支配してゐる英國に對し、雲南に深く食ひ込んでゐるフランスに對し、諸君は何うしてしかく寛大であるのか。それ等は邊疆の地であり、殆んど異民族の地であるからといふのか。しからば滿洲は邊疆ではないのか。内蒙は邊疆ではないのか。滿洲や内蒙は異民族の地ではないのか。諸君は曾つて、滅滿興漢の名によつて清朝——即ち滿洲朝廷を覆滅した。滿洲朝廷と滿洲人とはその故郷に歸らねばならなかつた。滿洲が獨立しても内蒙が獨立しても、これは正しく民族自決であり、民族主義の立場からは、異議を

挿む餘地はない筈である。故に滿洲國が出現しても、内蒙が獨立を要求しても、眞に公正なる立場からいへば、何人もこれを拒否することは出来ないのだ。

諸君は冀東や冀察はどうした、といふかもしれぬ。これ等自治政權の出現事情もまた多言を要せぬほど自然のコースであつたのだ。元來北支は中、南支の半植民地、被搾取地であつた。蔣政權は北支から多くの資財を奪つたが、殆んど北支に與へることはしなかつた。北支の民衆そのものが、果して蔣政權下に立つことを願つてゐるかどうか、寧ろ自治乃至半自治を望んでゐないかどうか。これは北支の民衆に直接訊いて見れば一番早分りであらう。尤も、北支にどんな政權が現はれやうとも、日本としては、單にそれが抗日ヒステリー患者でさへなければ、何等關知するところではない。日本はたゞ北支民衆と心からの握手を望んでゐるだけに過ぎないのだ。

諸君！ 聊か横道に外れた観があるが、兎に角日本は、蔣政權の抗日政策に何等の自然性をも合理性をも認め得ないのだ。たゞわれ等は、彼れの政策が、日本を徒らに苦しめたこと、そして反アジア的歐米追隨の危険性に充ちたものであることを知るのみだ。まだそれだけならいゝが、南京政府は最近に至つて共産黨や紅軍とさへ妥協した。更にソ聯と握手した。蔣介石が何千萬何億の國幣と數年の日子とを費して、國民の敵なりとしてその討伐に當つたところの共産軍——その共産軍は、今や蔣介石の友軍として迎

えられ、更に共産軍の背後からはソ聯の毛むぢやら赤い手が妖光を放ちつゝ支那の中央まで差し延べられて來たのだ。

諸君！ 蔣介石が何年間も躍起になつて討伐に當つたにも拘らず、なほ、容易に始末のつかなかつた共産軍が、そして共産黨が、愈々大びらに大手を振つて中國の眞ん中に乗り出して來たのだ。諸君はこれが一大禍根となつて、今後恐るべき事態が中國に發生することを想像しないか。そして東亞平和の希望が、かれ等の赤禍——ユダヤ禍によつて、微塵に蹂躪されるだらうとは思はないか。

諸君は、或は、勇敢な紅軍と親切なソ聯とが、中國の謂ゆる國難を救つてくれると期待してゐるかもしれぬ。憎むべき侵略者日本の魔手から、諸君を救つてくれるものはかれ等だと錯覺してゐるかもしれぬ。だが諸君！ 中國の眞實の國難を、殆んど自國の國難と同視せざるを得ない宿縁にあるのは、日本國の外にはない筈だ。自分の國に何の得にもならない事のために、戦争の危険まで冒して他國を救はふとする國があると諸君は想像し得るか。否、ソ聯は——ソ聯の手先きであるところの共産軍は。中國のために中國を救はんとするが如きものでは斷じてない。かれ等の目的は始めから決定されてゐる。それは中國の赤化と、そして中國のソ聯への隸屬化と、たゞそれだけだ。もう一つ加へるならば、東洋文化と東洋精神の中に呼吸してゐる諸君の傳統、諸君の生活を、ユダヤ的唯物主義の中に解消し去ることだ。それ以上でも

なければそれ以下でもない。かくて諸君がその國土とその文化とその精神とその生活とを、ユダヤ的唯物主義の祭壇に綺麗さつぱり奉納し終つた時に、赤魔は凱歌を擧げて勝利の歡喜に酔ひ浸ることであらう。尤もそうなつた時に、諸君の謂ゆる侵略者日本が、東洋平和建設の大理想を放棄するかどうか、そして中國を赤魔の跳梁に委せておくかどうかは甚だ疑問である。

諸君！ われ等は百パーセントの確信を以ていふが、斷じてそんな事が諸君の幸福ではない。

ソ聯も共産黨も、決して諸君の國難を救つてくれるものではない。否、中國がかれ等の手に委ねられること——それこそが中國の眞實の國難なのだ。いや、自己保身のために血迷へる蔣介石が、かれ等の手を取つて、中國へ導き入れたその事こそが、中國を、そして東亞を地獄のどん底へ叩き落そうとするところの、誠に累卵の如く危険なる國難なのだ。

蔣介石が正に爲し來たり、爲しつゝあるところは、すべて東洋人としての自覺を缺いた反アジア的行動であり、アジアを赤色、または白色帝國主義の魔手に賣らんとする恐るべき罪惡である——そうわれ等は斷定せざるを得ないのだ。

そして、およそこの危険を未然に防止するために、またこの大罪惡に天誅を加へるために、決然起つて膺懲の聖師を進むるに至つたのがこの度びの日本の態度である。

日本が立ち上つたのは、諸君を、況んや中國そのものを撃つためではない。諸君を、中國を、そして東亞を、赤色乃至白色ユダヤ人の手に賣らんとする亡國政策の遂行者蔣介石と、その一黨と、その軍隊とを撃つために外ならない。一言にしていふならば、日本は諸君の眞實の國難、そして東亞の大患を救ふために立ち上つたのだ。

諸君！ 中國を救ふものはソ聯ではない。英、米、佛でもない。それは日本なのだ！ 諸君の謂ゆる侵略者日本こそは、やがて諸君に心から迎えられ、そして諸君と共に固く手を取り合つて進み得る日の、遠からざることをわれ等は確信してゐる！！

日滿支の提携とアジア人のアジア建設

中國四億五千萬民衆諸君！

われ等は既に、東洋の平和實現のためには、日滿支三國の固き結束が絶対に必要であることを述べた。何んとなれば、この三つの國のみがこの大任を負ふ資格を有するものであり、この三つの國のみがこの大使命を遂行するに堪へ得るものであるからだ。

ところが、今や不幸にして、共にこの大任を果すべき友邦同志が戦火を交へてゐる。勿論それは、幾度か繰返したやうに、國と國とを擧げての戦ひではない。中國に蟠居するわれ等と諸君との共通の敵——諸君に對する暴虐政府、われ等を排撃するユダヤ人の手先、そして東洋平和の攪亂者たる南京大軍閥に對するわれ等の膺懲戦ではある。だが、しかし、兩國間に砲火が交へられてゐることは確かな事實であり、必ずしも歐米人ならずとも、これを日支戦争と見做すことは無理もない。而してこれは實に、諸君にとつてもわれ等にとつても、この上もなき痛恨事でなければならぬ。

だが諸君！ 親子も時に喧嘩をする、夫婦も、兄弟も時には殴り合ふこともある。喧嘩をし、殴り合ふことは必らずしも相互の愛の缺乏を意味するものではない。否な、互ひに愛すればこそ喧嘩もするといふバラドックスが立派に成立つのだ。相争ふことが却つてその後の結合を深める機縁となることは十分に期待される。われ等は再びかゝる争ひを繰返すべきではない。が、今は闘つて、闘ひ抜いて、一切の蟠りを掃蕩することによつて、寧ろ和親の機會たらしむべきである。われ等は深くそれを期待する。

諸君！ われ／＼アジア人は、餘りにも長く睡つてゐた。その間に北から、西から、南から、われ等のアジアは白人種によつて蠶蝕され略取された。諸君！ もう一度アジアの地圖を開いて見給へ。アジアの大部分、そして太平洋の大部分は、明かに歐米列國と同じ色に塗られてゐる。そしてアジア十億の同胞

は、その大半まで白人諸國の差し延べた鬱々たる巨枝の下に、四六時中天日を蔽はれてゐる。かくてわがアジア同胞の大半は、今や漸やく目醒めて天日の光を仰がんとすれど、白人諸國の侵略の枝は、餘りにも鬱蒼として殆んど大空を遮断してゐるのだ。

だが諸君！ われ等は何故この不便を忍ばねばならぬのか。われ等は果してそれを忍び得るか。

抑もかれ等白人種は何んの善根によつて、何んの特權によつて、かくも特別なる天恵に浴し、またかくも特別なる繁榮を享受し得るのか。諸君！ かれ等のかゝる特權を齎した経路が抑も何んであつたか。諸君はよくそれを知つてゐる筈だ。諸君は自國の體験によつて、諸君各自の活きた眼によつて、よくその経路を實觀して來た筈である。

白人諸國は、先づ第一にアフリカを、次にアメリカ大陸を、次でアジアを、そして太平洋諸島を、キリスト教の福音を煙幕としつゝ、結局は軍艦と大砲とを差し向けて、いとも易々と料理し了つたのではないか。侵略者——國泥棒！ われ等が安眠を貧つてゐる間に、いとも簡単にそれをやつてのけたかれ等は——諸君！ そのかれ等は、今や不戰條約、國際聯盟、世界平和、共存共榮、——そうした一聯の空念佛を世界に向つて放送してゐるのだ！

諸君！ 今や滿腹しきつたかれ等は、戦争費が何十倍何百倍化した近代戦が、最早かれ等には徒らに損

失多く、しかも利潤少きことを覺るに至つたのだ。そしてかれ等に損失多き方法の廢棄を、すべての國に
向つて説きつけやうとしてゐる！

諸君！ かれ等が兎も角も、かの忌むべき戰爭を排斥せんとするに至つたことは、動機の如何に拘らず
甚だ結構である。それは宜しい。だが諸君！ かれ等は戰爭を忌避することによつて、侵略そのものを思
ひ止つたものと考へるか。かれ等は勿論、如何に世界平和、共存共榮の空念佛を唱へやうとも、一旦延べ
擴げたその侵略の枝を、然り恐らく十億近い人類を日蔭に苦しめてゐるところのその大きな枝を、一尺で
も一寸でも引つ込めやうなどとは考へてゐない。いや、事實は正にその正反對なのだ。

諸君！ 持てる者は、持てるが故に益々多くを持たんとするものだ。かれ等を以つて、文字通り「満足
せる國」などと思つたら大間違ひだ。かれ等は勿論満腹はしてゐる。だが、果してかれ等は満足してゐる
であらうか。ます／＼多くを望んでゐないだらうか。それは諸君が、諸君の國における事實によつて、
最もよく了解してゐる筈である。かれ等は既に満腹はしたが、なほ、更に以上の珍珠と佳肴とを諸君の國
に求めてゐる。日本は今米と水とを世界に求めんとしてゐる。だが、かれ等はシャンペンと珍珠と佳肴と
を到る所に漁らうとして、尤も安上りな舌頭三寸の外交手段による平和的侵略を試みんとしてゐるのだ。
勿論最後の手段として、かれ等と雖も優勢な武力を用意してゐることは言ふまでもない。貧乏飽くなしと

は實にかれ等の事である。

だが諸君！ われ等は白人諸國のシャンペンや珍珠佳肴の犠牲とされてはならない。われ等十億のアジ
アの同胞は、まづ生きるために、人類正義のために、アジアの平和建設のために、東洋文化の發揚のため
に、畸型的物質文明改作のために、奮然起つてわれ等自身の權利を主張せねばならぬ。

諸君！ アジアにも既に黎明の光りは射し初めてゐる。われ等は餘りにも長夜の夢を貪り過ぎた。眼を
大きく見開いて、正しく四邊を凝視せねばならぬ。その時われ等は、わがアジアが、アジア人のアジアで
はなく、殆んど白人のアジアと化し去らんとしてゐる事實を見るのだ。今や、アジアの土地も、アジアの
文化も、アジア人の生活も、白人の大きな手に奪ひ盡されやうとしてゐる。

今や太陽は、アジアを正しく照してはゐない。まづわれ等は日光を遮ぎるものを拂ひ除けねばならぬ。
アジアは曾つて釋迦を生み、孔子を生み、キリストを生み、マホメットを生んだ。アジアは曾つて燦然た
る光りに輝いてゐた。われ等は再びこの光りをわれ等の手中に取り戻さねばならぬ。

諸君！ 不幸にも今われ等は、極東の一角において互ひに干戈を交へてゐる。だが、これもアジアの解
放とアジアの再建設との一過程であるならば止むを得ない。しかし、われ等アジア民族は、取分け極東民
族は、如何に争はふとも、如何に搏ち合はふとも、斷ち切ることの出来ない宿命の下に立ち、避け難き使

命の下に立つてゐる。

諸君は今、われ等日本國民の所期に反し、われ等日本國民の希求に反して、或はわれ等を敵視してゐるかもしれない。だが諸君！ かりに諸君がその憤激の餘り、日本を南極の果てに蹴散らしたと想像して見給へ。その時諸君の立場はどうなるか。われ等は思ふ、恐らくアジアは、そしてアジア民族は、永遠に天日を見ることは出来ないのではないかと。これは決して日本國民の己惚れではない。もし東洋に日本がなかつたなら——と白人諸國は慨然として東洋の一角を睨んでゐるのだ。諸君にもこの事實は解る筈だと思ふ。もし極東に日本がなかつたなら、勿論、滿洲も朝鮮もロシアのものとなつてゐたらう。いや、諸君の中國も、果して何うなつてゐたか疑問である。

諸君！ 諸君の最も崇敬する孫文博士は、曾つて、大震災のために日本が滅亡に瀕したといふ誇大な報道に接した時、彼れは悵然として呟いた。「噫、中國將來の運命も亦危いかな」と。彼れは日本なき中國將來の危険を想像したのだ。孫文ほどの人物なら、確かに這般の消息を解せぬ筈はない。

反對に、假りに中國が極東から西半球に移轉したとしたらどうか。日本はアジア再建設の同志を失つて、極東の一角に孤影悄然たるものとなり終るであらう。這般の消息はわれ等日本國民のよく了解してゐるところである。

諸君は、わが國人が、日支兩國關係について、「唇齒輔車」とか「鳥の双翼」とか「同種同文」とか唱へて、頻りに日支親善を説き立てる様を見て、欺瞞的な口頭禪、偽善的のゼスチュアールと誤解してゐるかもしれない。もしそうであれば、諸君はわれ等のアジア的自覺と日支提携に對する衷心の希求とを理解しないのだ。われ等が日支親善の必要を叫ぶのは、決して日本一國の利益や便宜の立場からではない。況んや白人諸國の如く、中國をシャンペンの資に供せんとするがためではない。日支親善なくしては極東民族の繁榮はなく、東亞の安定もなく、東洋の平和もなく、アジアの解放もなく、アジアの再建もなし、との確乎たるアジア的自覺と信念とに依るのである。一と度び、アジア的自覺の上に立つ時、極東の一角で日支相争ふことは、われ等の眼には、明かに兄弟牆に闘ぐ所以としか思はれないからだ。

諸君！ 今やわれ等はアジア解放のために、これを阻止せんとする障礙物と戦つてゐるのだ。わが皇軍が、如何に無辜の中國民を傷けまいと努力してゐるかを見よ。わが空軍も、無辜の民衆の頭上に爆彈を投下しやうとはしてゐない。われ等は斷じて、中國四億五千萬民衆諸君を敵としてゐるのではないのだ。

諸君！ 遠からず極東平和の障礙物は一掃されるであらう。そして戦火は遠からず收まるであらう。ああ、諸君！ その時こそ、明天日の如き心を以つて、より固く、より強く諸君と握手し得るであらうことをわれ等は衷心から祈願してゐる！

中國四億五千萬民衆諸君！

その時こそわれ等は、互ひに赤心を吐露し合ひ、肺肝より迸る熱情を以て、強く固く諸君と相抱き、共に俱にアジア再興の聖途に、足音高く前進を開始し得るであらう。

(終り)

昭和十二年九月廿日印刷納本
昭和十二年九月廿二日發行

(定價金拾五錢)

發行人

五十嵐 隆

印刷人

東京市麴町區飯田町一ノ四
長谷川 利廣

印刷所

東京市麴町區飯田町一ノ四
長谷川製本印刷所

發行所

東京市麴町區内山下町一ノ一
東洋ビル三〇ノ一、二、三室
國際日本協會
電話銀座(57)六二八二番
振替東京二四二〇四番

